

事例を読む

チヨークによる探索活動

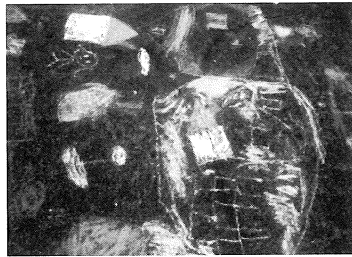
―呼びかけること、応えること―

郡司明子

小学校での活動

小学校には、使い込まれて小さくなったチヨークがたくさんある。学級によっては、この「チビ」チヨークを集める係の子どもがいて、次なる出番を待ち望んでいく。

教室での役割を終えたこれらのチヨークで、屋上の広々とした場所に、思う存分、好きなものを好きなだけ描く活動を「アート」の時間に行ってきた。既成の画用紙という枠組みから解放たれて、仲間と共



に、体全体で描く喜びを味わってほしいと願い、小学校では授業として提案してきた活動である。改めて小学一年生の写真記録を眺めてみると、チヨークに魅了され、夢中になってその素材や場のあり様をわかって、探索活動をし続ける子どもたちの姿が浮かび上がってきた。

チヨークは軽く、小さな子どもの手にもすんなりなじむ。子どもの体の動きがそのまま線となり、どこまでも描いていける。わずかな力で折れるため、扱いやすく、塗り込みも心地よく進む。軽く描いて自分の力で消せるのがいい。雨が、水が、チヨークの跡を流し、時間の経過とともに風化していく感じもいい。

子どもたちは大好きな電車を語り合い、線路でつながり合う。色とりどりの家を囲む花畑で空間を共有し合う。描いている地面から身を起こして、やがて、チヨークの線はバッテリーボックス、ベースを示し、即興的に野球場の三次元空間が出来上がる。一

方で、何かを描く以前に、固形としてのチョークを力強く塗りたくり、粉状にすることに熱心に向かう子もいる。粉にして色屋さんののだという。混ぜ色もあり、美しい調合がなされる。このように、一年生四十人が同時に繰り広げるさまざまな活動も魅力的である。それにもまして、子どもが生活の真ん中にいて、一人ひとりの言動からすべての物語が始まる保育の現場には、学びの原点としての芳香が漂い、時を紡いで豊かな事例が熟成されている。日々の事例を楽しそうに語る保育者の姿には、小学校教諭として学ぶべきことが多々あり、あこがれを抱いてきた。そんな事例の一つ、吉岡先生と子どもたちが織り成す「チョークでアート」に、造形活動の視点から迫ってみたい。

身体的探索活動としての造形行為

〈呼びかけ―応答〉

山道を歩けば、大地を踏みしめる―大地がそれ

に応える、といった〈呼びかけ―応答〉を体で実感できるだろう。津守真氏は、保育が身体労働を伴う仕事であり、保育者が子どもたちの中にいて身体を動かしながら応答していくことの重要性を述べている。^注 造形活動も同様である。例えば、木を削るという造形行為による呼びかけがあり、それに対する対象世界、すなわち木からの応答がある。それらが行き交う場となる体は、行為を通じて物事の道理や調整の必要を学び取っていく。

この事例では、チョークを片手に世界の味わい方を探る子どもの姿がある。チョークで描く、それは身体的探索活動を通してあらゆる場に呼びかけ、その応答を確かめる行為である。コンクリート敷きのたたきに描く、園庭の土の上、手すり、プラタナスの木肌、それぞれに身体感覚で受け止める応答は異なるだろう。子どもたちは、その違いを見いだそうと次々に別の場所を試し、違いを楽しむ。子どもたちが課せられた唯一の事柄「これ(たわし)でこすつ

て消えるところにしてね」という教師の言葉に、描く―消す、再び試しては描くことを繰り返す。ここに造形的な表現活動の極意が埋め込まれている。

造形的な表現活動における足し算、引き算

造形活動において、その表現の特質を二つの方向性として言い表すことがある。一方は、描く、並べる、積む、貼るなど構築性に基づくプラス方向の活動。もう一方は、消す、切る、破る、壊すなど破壊性に基づくマイナス方向の活動である。前者を「足し算の表現」、後者を「引き算の表現」と言うかわかりやすい。どちらも重要な表現活動であり、互いを発揮することで、物事を作り変え、作り続けていくことの醍醐味を味わうことができる。

先を見通す教師の何気ない一言に含まれた「消す」という行為。消えるか否かを試す志向が、描く活動の範囲を広げ、対象の異なる質感への気付きを促し、より豊かな探索活動に導いていることを見逃しては

なるまい。とかく、子どもを表現活動に誘う時、私たちは、構築性を求め、プラス方向の活動のみに終始しがちである。ところが、一見ネガティブに受け取れるマイナスの方向性、消す、壊すといった行為は、非常に創造性の高い、再生を導く前向きな行為であり、探索活動には欠かせない要素といえよう。豊かな造形活動とは、単一の方向に縛られることなく、子どもが存分に足し算、引き算の力を発揮し、物事を作り、作り変え、作り続けていくことのできる活動である。描いたチョークが消える場所を選ぶ、プラタナスにこすりつけたチョークの色が水をかけると変わることに出会う。このように、子ども自身が自らの行為を通して発見したこと、実感したことに、学びの意味や価値が生成されていく。

おおらかな圖の文化の中で

吉岡先生の「チョークでアート」の実践を学生と読み、大学構内で追体験してみた。子どもと同様に

水を利用して発泡を楽しむ学生、水たまりの中にも描けることを発見、アスファルトはもちろん、木の幹にも描き、校舎の壁にも描き……。十分に分別ある学生の行為だとわかりつつも、着任したての大学でいづどこからクレームが入るやもしれず、学生の探索活動には共感しながら、実は終始気が気でない私があった。表現活動を丸ごと受け入れることは容易ではない。

一方で、おおらかな吉岡先生の笑顔が浮かぶ。子どもの発見を驚き、共に喜び、本気で感動して、子どもと一緒にあって面白がり、自ら子どもの中に体丸ごと分け入って行かれる吉岡先生。その姿が、保育室前の太いプラタナスの存在に重なる。

五月には、子どもたちが幹を水でぬらし、色の変化を楽しんだ木。時を経て八か月後には、チョークの粉の色を楽しみ、水でチョークの色が変わることへの気付きをもたらしてくれた木。「プラタナスの木は『やってもいいよ』『試してごらん』と、でんと構

えて立っており、子どもたちのいろいろな思いや気持ちを受け止めてくれる仲間のような存在」と吉岡先生は言う。まさしく、子どもにとっての先生は、プラタナスの木のように、大きく腕を広げて探索活動に誘い、子どもの知りたい、やってみたいという思いを受け止めてくれる存在なのである。

教師が、やわらかく、穏やかでいることは園の文化そのものを象徴している。ここでは、温かな雰囲気のもと、園全体がおおらかな文化の中で、子どもの探求心を大事に育んでいる。そこにはずっと長いこと、子どもの探索活動におけるさまざまな呼びかけに、でんと構えておおらかに応えてきたプラタナスの木もある。

(群馬大学／元お茶の水女子大学附属小学校教諭)

注

津守真『子どもの世界をどうみるか 行為とその意味』NHKブックス 一九八七年